原著論文

福岡県の産業博物館の現状と課題

武田 竜弥

名古屋工業大学大学院工学研究科

Current Conditions and Problems of Industrial Museums in Fukuoka Prefecture

Tatsuya TAKEDA

Graduate School of Engineering, Nagoya Institute of Technology, Gokiso-cho, Showa-ku, Nagoya-shi, Aichi 466-8555, Japan

Abstract : Since 2003 the Japanese government has been enhancing tourism-related measures in order to increase Japan's national tourism industry. In this situation industrial tourism is greatly expected to develop as a new type of tourism in which people can learn and enjoy local culture and history from different angles. Industrial museums play an important role as core facilities for this industrial tourism. But unfortunately there is not enough data about industrial museums in Japan, because major surveys don't treat them as an independent category. For this reason we started original research on them in 2005. In this paper, based on the results of our research, we clarify current conditions and problems of industrial museums in Fukuoka Prefecture.

Keywords : *Industrial Museum, Industrial Tourism, Kansei-Sociology*

1. はじめに

戦後、わが国は奇跡ともいわれる経済復興を遂げたが、高度経済成長の牽引役が製造業だったこともあり、観光は長いこと国の基幹産業とはみなされてこなかった。転換の兆しが見えたのは2002年のことである。この年、国土交通省が観光を21世紀のリーディング産業と位置づけ、その振興を積極的に図るべきとの提言を発表した。これを受けて翌年、時の小泉内閣は「観光立国宣言」を出すとともに、2010年までに訪日外国人旅行者数1000万人を目指す「ビジット・ジャパン・キャンペーン」を開始した。途中新型インフルエンザの流行などがあり、この目標は達成できなかったものの、2003年に521万人だった訪日外国人旅行者数は、2010年にはその1.65倍に当たる861万人に達した[1]。またこの間、2006年には国の観光政策の基盤となる観光立国推進基本法が成立（翌年1月施行）、2008年には国土交通省の外局として新たに観光庁が設けられた[注1]。

先行論文[2]でも指摘したように、こうした施策はもともと経済政策の一環として発想されたものだったが[注2]、観光の価値という面から考えた場合、現代社会における感性価値の重要性を示唆するものとして興味深い。なぜなら、観光とは非日常的な体験や異文化などとの交流を通して生活の質を高める行為であり、その際最も重要な尺度となるのが観光者の感性に基づく主観的価値（＝感性価値）に他ならないからである。今日、観光振興が国の重点政策の一つとして位置づけられるようになった背景には、人々の価値観が感性価値の重視へとシフトしてきたことがあるといえる。

さて、一口に観光といってもその形態は様々であるが、近年わが国の特性を生かす新たな観光のあり方として大きな注目を浴びているのが、産業観光である。産業観光とは、歴史

的・文化的価値を持つ工場やその遺構、機械・道具類、産業製品、生産活動などを産業文化財と位置づけ、それに触れることを目的とする観光活動である。普遍的な科学技術とは違い、それを用いる産業やその発展形態は地域によって多様な姿を取る。産業観光とはこの地域性に着目した新たな観光のあり方であり、史跡やリゾートなど従来型の観光資源に恵まれない地域における観光振興の手段としても大いに期待されている[3-6]。

産業観光の形態は大きく二つに分けられる。一つはかつて使用された建造物や機械・道具類など、いわゆる産業遺産の見学を主とするもの、もう一つは工場見学や農漁場における体験作業など、現役の産業に触れるものである。但しいずれの場合でも、産業観光には学びの要素が含まれるので、予備知識の少ない観光者にその魅力を味わってもらうには、相応の工夫をしなければならない。そこで求められるのが、当該産業の成り立ちや特徴を観光者にわかりやすく紹介する展示施設、すなわち産業博物館である。

産業博物館は実学的意味が大きいという点で他の博物館とは異なった特色を持つ。またそこには具体的な産業となって現れた地域の特性が集約的に表現されているので、地域により育まれた感性を伝える場としても有効である。まさに産業博物館は、産業観光の軸となる施設として大きな価値と可能性を有しているのである[7][注3]。

ところが一方でわが国の産業博物館の現状を見ると、そこには克服すべき課題が山積している。中でも問題なのは、各地にある産業博物館の実態を示す基礎的なデータベースが存在しないという点である。これは一般に行われる博物館調査の分類に産業博物館という種別が欠けていることによる。たとえば文部科学省が3年ごとに実施する社会教育調査に種別別博物館数の調査がある。しかしそこでの分類は、総合博物館、科学博物館、歴史博物館、美術博物館、野外博物館、動物

園、植物園、動植物園、水族館の9種類となっており、産業博物館についてはその館数すらわからない。同様のことは博物館関係者の団体である財団法人日本博物館協会の調査に関してもいえる。こちらでは分類が10種類（総合、郷土、自然史、理工学、歴史、美術、動物園、植物園、水族館、動・水・植）となっているが、やはり産業博物館という種別はない[8]。

この問題は、設置者別の分類からも同様の帰結に至る。たとえば、しばしば産業博物館と混同されるものに「企業博物館」という呼称がある。これは企業が設置者となっている博物館のことで、企業のメセナ活動[注4]が注目を浴びようになった1990年代から一般にも認知されるようになってきた[9-11]。しかし上述のように、博物館調査における博物館には美術博物館（いわゆる美術館）のようなものも含まれるので、企業博物館のすべてが産業博物館であるとは限らない。たとえば出光興産株式会社が設置する出光美術館は、企業博物館ではあるが、産業博物館ではないのである。また当然のことながら、産業博物館の中には燕市産業史料館や大阪企業家ミュージアム（設置者は大阪商工会議所）など、企業ではない自治体や各種団体が設置したものも数多くある。結局、設置者別の分類から見ても産業博物館の実態はつかめないのである。

以上のような問題意識から、筆者は全国の産業博物館の調査に着手し、その成果を発表してきた[2, 12, 13]。また2008年度からは科学研究費補助金の助成を得て、主に中国・四国地方、九州地方の産業博物館を重点的に調査した。本稿ではこの調査結果を受けて、九州の中でもとりわけ産業観光の推進に熱心な福岡県の産業博物館の現状と課題について報告したい[注5]。

2. 調査方法

2.1 産業博物館の選定基準

本調査に当たってまず必要なのは、どのような施設を産業博物館とみなすのか、その基準を定めることである。筆者は産業博物館を軸とした産業観光の活性化を支持する立場にあるので、通常は産業関連の展示が行われている施設を一括して「産業博物館」と呼ぶことにしている。しかし今回はより厳密なデータベースの構築を目指しているので、以下のような基準を設けることにした。

その第一は、施設の主たる目的が一般公開を前提とした産業関連の資料の展示であることである。各地の物産館や企業のショールームなどでも当該産業に関する資料（中には貴重な資料もある）が展示されている場合があるが、その最終的な目的はそこで扱われる製品の販促や宣伝にあると考えられるので、今回はそうした施設を産業博物館とはみなさないことにした。また「ものづくり体験館」のような施設も展示そのものに施設の設置目的があるわけではないので、これを除外した。さらに伝統工芸の展示館のように、主として美術的価値のある製品の展示を行っている施設は、産業博物館よりもむしろ美術博物館に分類した方が適切だと思われるので、

これを除外した。郷土博物館のような施設は、展示の大半が産業関連のものである場合に限り、産業博物館とみなすことにした。

第二の基準は、当該施設の中に専用の展示室があることである。産業関連の資料は、その産業の種類に応じて大きさに開きがあるので、施設（建物）の規模だけではその充実度を測ることはできない。しかし専用の展示室を持たない施設の場合はそもそも博物館と呼ぶことが難しいので、これを除外した。またたとえ専用の展示室があっても、常設の展示資料が極端に少ない場合は、やはり博物館としての要件を満たしていないと判断することにした。

2.2 選定方法

既述のように、わが国には産業博物館の現況に関する基礎的なデータベースが存在しない。そこで本調査では、産業博物館の選定に当たって以下のような3段階の手順で絞り込みを行った。

まず候補となる施設をピックアップするために、以下のサイトを参照し、産業関連の展示が行われていると思われる施設をすべて抜き出した[注6]。

- ①福岡県の公式ホームページ[14]
- ②福岡県内の全市町村の公式ホームページ[注7]
- ③上記①および②にリンクされている地元観光協会等のホームページ
- ④国際博物館会議(ICOM)日本委員会のホームページの管理サイト「インターネットミュージアム」[15]
- ⑤独立行政法人日本科学振興機構が運営する「日本の科学館めぐり」[16]

次に、上記で抜き出した施設のホームページを参照し、前項の基準から産業博物館と判断できる施設を絞り込んだ。自前のホームページを持たない施設については、電話取材などにより同様の絞り込みを行った。

最後に、上記で絞り込んだ施設を筆者が実際に視察し、前項の基準に照らして産業博物館とみなすことができるかどうかを判断した。

3. 調査結果と分析

前項の調査の結果、福岡県には現在、本稿の定義する産業博物館が計17館あることがわかった。本節では主として産業観光の視点から、福岡県の産業博物館の現状と課題について分析する。

3.1 所在地とテーマ—その地域的特性

はじめに福岡県における産業博物館の分布についてであるが、県内60市町村のうち産業博物館が設置されていたのは、北九州市、福岡市、田川市、直方市、宮若市、鞍手町、久留米市、大牟田市の8市町であった(表1)。設置数別では、北九州市が8館、福岡市と久留米市がそれぞれ2館、その他

表1 福岡県の産業博物館 1

館名	所在地	テーマ	設置者	開設年	文化財 ¹
九州鉄道記念館	北九州市（門司区）	鉄道	北九州市	2003	○
出光創業史料館	北九州市（門司区）	石油	出光興産（株）	2000	×
門司電気通信レトロ館	北九州市（門司区）	電信・電話	西日本電信電話（株）	1994	○
北九州市門司麦酒煉瓦館	北九州市（門司区）	ビール	北九州市	2005	○
ゼンリン地図の資料館	北九州市（小倉北区）	地図	（株）ゼンリン	2003	×
TOTO 歴史資料館	北九州市（小倉北区）	衛生陶器・食器	TOTO（株）	2007	○
わかちく史料館	北九州市（若松区）	土木・建設	若築建設（株）	1997	×
白島展示館	北九州市（若松区）	石油	白島石油備蓄（株）	1997	×
九州エネルギー館	福岡市（中央区）	電気	九州電力（株）	1982	×
博多港ベイサイドミュージアム	福岡市（博多区）	港湾	福岡市	2001	×
田川市石炭・歴史博物館	田川市	石炭	田川市	1983	○
直方市石炭記念館	直方市	石炭	直方市	1971	○
宮若市石炭記念館	宮若市	石炭	宮若市	1977	×
鞍手町石炭資料展示場	鞍手町	石炭	鞍手町	1990	×
つきほし歴史館	久留米市	履物	（株）ムーンスター	1993	×
久留米絨資料館	久留米市	織物	（財）久留米地域地場産業振興センター	1983	×
大牟田市石炭産業科学館	大牟田市	石炭	大牟田市	1995	×

¹ 国の有形文化財もしくは経済産業省の近代化産業遺産に認定されている建造物、展示品があるもの

は各1館である。地域別にまとめると、北九州地域8館、福岡地域2館、筑豊地域4館、筑後地域3館となる〔注8〕。

全体のおよそ半数が集中する北九州市は、1963年に門司、小倉、戸畑、若松、八幡の5市が合併してできた九州初の政令指定都市である。その後1974年に小倉区が南北に、八幡区が東西に分区したため、現在は7区で構成される。このうち産業博物館の所在が確認されたのは、門司区（4館）、小倉北区（2館）、若松区（2館）の3区である。

周知のように、この地域は明治以来、わが国を代表する工業地帯として発展してきた。その端緒となったのは1889年、門司港が国の特別輸出港に指定されたことによる。1891年には九州鉄道が門司駅（現・門司港駅）を開業するとともに、筑豊興業鉄道が若松－直方間を開通させ、筑豊炭田から若松および門司への鉄道による石炭輸送が可能となった。これにより門司港は全国一の石炭輸出港へと成長し、また若松港が主に国内向けの石炭積出港として整備・開港された。さらに1898年には門司に日本銀行西部支店（四国・九州を統括）が開業、1901年には現在の八幡東区の地に官営八幡製鉄所が開業した。以後1910年代までに沿岸部を中心に工場の進出が相次ぎ、北九州工業地帯の基礎が出来上がった。

戦後の高度経済成長期には、わが国の主要エネルギーが石炭から石油に転換したこと、この地域の産業構造が素材産業に偏っていたことなどから、北九州工業地帯は停滞を余儀なくされた。しかし皮肉にもこのことが逆に多くの近代化産業遺産をこの地に残す結果となった〔17, 18〕。今回確認された北九州市の産業博物館8館のうち3館（九州鉄道記念館、門司電気通信レトロ館、北九州市門司麦酒煉瓦館、図1-3）が建物にこうした歴史的建造物を利用して、また白島展示館を除く7館が戦前の資料の展示を行っていた。

各館のテーマは表1にまとめた通りである。このうち門司電気通信レトロ館とゼンリン地図の資料館の展示内容については、地域との関連が薄いと判断された。また石炭の利用と輸出で栄えた北九州であるにもかかわらず、石炭をテーマとした博物館がなかったことも注目された。

次に福岡地域であるが、域内人口と観光客数とともに県内最大であるこの地域に産業博物館が2館しかなかったのは意外だった。たしかにこの地域は北九州のような形で工業化が進んだわけではないが、古くから交通の要衝として栄え、残された産業遺産もかなりの数に上る〔19〕。これらを有効に活用する手段を考えるべきではないだろうか。

図1 九州鉄道記念館

図2 門司電気通信レトロ館

図3 北九州市門司麦酒赤煉瓦館

福岡地域の産業博物館2館はいずれも福岡市内にある。但し地域性という点から見た場合、両館の展示内容はきわめて対照的である。博多港バイサイドミュージアムは、博多港のランドマークともいえるポートタワーの真下にあり、館名の通り「博多港」をテーマとしている。これに対して九州エネルギー館は、科学館的な要素が強く、展示内容に地域性はほとんど見られない。展示の規模や水準は後者の方が格段に優れているので、いまだし地域性に配慮した展示を付け加えると、観光資源としての価値が高まるように思われる。

次に筑豊地域であるが、ここには計4館の産業博物館が設置されていた。テーマはいずれも石炭で、地域性に優れた内容である。筑豊の石炭はすでに江戸時代中期から瀬戸内海地方の製塩用燃料などに用いられていた。しかし幕末の開国以降、蒸気船の燃料として新たな需要が生じ、加えて明治政府による鉱山解放令が民間資本の参入を促したことで大規模な開発が始まることになった。1880年代には安川・麻生・貝島などの地元資本が炭坑の機械化に着手、1890年代には三井・三菱・古河・安田などの中央資本もこの地に進出した。1901年の官営八幡製鉄所の開業とそれに伴う北九州工業地帯の成立はこの地の石炭の需要をますます増加させ、最盛期の筑豊炭田はわが国の出炭高の約半分を占める大炭田となった。戦後、石炭から石油へのエネルギー転換により、筑豊炭田もまた1973年の貝島大之浦炭坑の閉山をもってその歴史に幕を下ろしたが、国内最大級の炭田であっただけに、今なお貴重な産業遺産が数多く残されている[20]。

今回の調査では、田川市、直方市、宮若市、鞍手町に産業博物館の所在が確認された。やや意外であったのは、筑豊炭田の中心地で、現在もなおこの地域で最も人口の多い飯塚市に産業博物館が存在しなかったことである。確認された4館のうち歴史的建造物を含むものは、田川市石炭・歴史博物館と直方市石炭記念館の2館であった。但し前者の建物は新設されたもので、歴史的建造物（大煙突・堅坑槽等）は屋外展示物として保存・活用されている（図4-6）。

最後に筑後地域であるが、この地域には計3館の産業博物館が設置されていた。域内の分布は、久留米市2館、大牟田市1館である。

筑紫平野の中央に位置する久留米市は、古くから北九州と南九州を結ぶ交通の要衝として栄えてきた[注9]。江戸時代後期には久留米餅の井上伝、東芝の基礎を築いた「からくり儀右衛門」こと田中久重らを輩出したほか、昭和初期には

現在のムーンスター、アサヒコーポレーション、ブリヂストンなどに繋がる企業群がゴム産業を発展させた。今回の調査で確認された2館はいずれも地場の産業・企業をテーマとしており、地域性が豊かである。

一方、福岡県の南端に位置する大牟田市は、三池炭鉱とともに発展した町である。三池炭鉱の歴史は江戸時代中期、柳川藩家老小野春信による平野山坑の開削に始まる。明治維新後は一時官営となるが、1889年に三井に払い下げられ、大規模な開発が進んだ。三井は炭坑の機械化や運炭鉄道の敷設、三池港の開港などに力を尽くしたほか、大牟田川沿いを中心に石炭化学コンビナートを発展させた。様々な資本が入り乱れた筑豊と違い、三池はほぼ三井単独で開発が進められた点に特徴がある。

戦後は石炭から石油へのエネルギー転換が進む中、1960年の三池争議、63年の三川坑爆発事故（死者458名）など、三池は厳しい道を余儀なくされた。三池炭鉱が最終的に閉山となったのは、筑豊より四半世紀遅い1997年のことである。近年まで操業されていただけあって、残された産業遺産の保存状態がよく、その一部（宮原坑跡、万田坑跡）は国の重要文化財にも指定されている[注10]。大牟田市石炭産業科学館の展示はこの三池炭鉱の歴史を軸に構成されており、同市にとっては郷土博物館と呼びうるほど地域性に溢れている。

3.2 設置者

次に各施設の設置者についてであるが、表1に示したように、全17館の設置者別の内訳は、企業8館、自治体8館、団体（財団法人）1館であった。但し、久留米餅資料館の設置者である財団法人久留米地域地場産業振興センターは久留米市長が理事長を兼ねる市の外郭団体なので、自治体系が9館とみなすこともできる。

これらを地域別に見ると、北九州・福岡地域では全10館のうち7館が企業の設置であったのに対して、筑豊・筑後地域においては全7館のうち6館までが自治体もしくは自治体系財団の設置となっていた。産業博物館に限らず、一般に博物館は入場料収入だけでは運営が難しいので、その設置者には継続的に多大な負担がかかる。調査結果は、そうした負担に耐えうる企業が県北部に集中していることを表している。

ただ一方で注目しておきたいのは、九州鉄道記念館の事例である。この博物館は自治体（北九州市）が設置したもので

図4 直方市石炭記念館

図5 田川大煙突

図6 田川堅坑槽

あるが、土地、建物、展示品については企業（九州旅客鉄道株式会社）から無償貸与を受けている。つまり、自治体もしくは企業が単独で負担を負うのではなく、両者が協力して博物館を支えているのである。こうした手法は企業博物館の少ない地域において産業博物館を発展させるのに大いに参考になるばかりでなく、異業種を組み合わせた博物館を設置する際にも有力な手法になると思われる。

なお展示内容との関連で言うと、企業博物館の展示はほとんどの場合当該企業の活動を軸に構成されるので、必ずしも地域性に優れるとは限らない。前項の分析で地域性が薄いと判断された3館（門司電気通信レトロ館、ゼンリン地図の資料館、九州エネルギー館）の設置者がいずれも企業であることは、これを実証している。

3.3 アクセス

次は各博物館へのアクセスについてである。ここでは鉄道駅から徒歩圏内にあるものをA、バス停から同圏内にあるものをB、その他をCに分けた。すると、県内17館のうちAに属するものは11館、Bに属するものは4館、Cに属するものは2館という結果となった（表2）。

産業博物館の設置場所は歴史的建造物の有無などによっても大きな影響を受けるので、必ずしもアクセスの便ばかりを優先させることはできない。たとえば上記のCに属する白島展示館は、アクセスの便こそ悪いものの、展望室から白島国家石油備蓄基地を眺望できる場所にある。しかし特段の優位性がないにもかかわらず、交通手段への配慮に欠けた博物館は、やはり問題であるといわざるをえない。そうした事例に当たるのがCに属するもう一つの博物館、大牟田市石炭産業

科学館である。

既述のように、大牟田市には国の重要文化財にも指定される貴重な産業遺産が数多く残されているが、そのほとんどは大牟田駅の東側と南側に位置している。にもかかわらず、石炭産業科学館は駅の西側にあるばかりでなく、同駅からも最寄りのバス停からも徒歩圏内にはないのである。これではいくら展示そのものを充実させても、来館者が増えるとは思われない。なぜこのような場所に博物館をつくることになったのか。設置者である大牟田市にはそれなりの事情があったと推測されるが、来館者の利便性という面から見る限り、適切な場所であるとはいえない。

3.4 開館時間

各館の開館時間は表2に示した通りである。最も多かったのが9時～17時で計7館、次いで10時～17時が計5館、以下9時半～17時と10時～16時がそれぞれ2館、9時半～17時半が1館である。開館時刻だけでは、9時が7館、9時半が3館、10時が7館、閉館時刻だけでは、16時が2館、17時が14館、17時半が1館となる。

全体として見ると、開館時間そのものは一般の博物館と同等の時間が確保されているといえる。ただ残念なのは、夜間開館を実施している博物館が全くなかったことである。学生や会社員など日中に時間を取ることが難しい人にとって、夜間開館は博物館を訪れる大きな動機となる。より多くの人々に産業博物館の魅力を知ってもらうためにも、せめて週に一度くらいは夜間開館を実施することを検討すべきではないだろうか〔注11〕。

表2 福岡県の産業博物館 2

館名	アクセス ¹	開館時間	休館日 ²
九州鉄道記念館	A (×)	9:00～17:00	第2水曜日（祝日の場合は翌日、7月は第2水・木曜日）
出光創業史料館	A (×)	10:00～17:00	月曜日（祝日の場合は開館）
門司電気通信レトロ館	A (○)	9:00～17:00	月曜日（祝日の場合は翌日）
北九州市門司麦酒煉瓦館	A (×)	9:00～17:00	無休
ゼンリン地図の資料館	A (×)	10:00～17:00	土・日曜日、祝日
TOTO歴史資料館	B (○)	9:30～17:00	土・日曜日、祝日
わかちく史料館	A (○)	10:00～16:00	月曜日、祝日
白島展示館	C (○)	10:00～16:00	月曜日、第4火曜日
九州エネルギー館	A (○)	9:00～17:00	月曜日（祝日の場合は翌日）
博多港ベイサイドミュージアム	B (×)	10:00～17:00	無休
田川市石炭・歴史博物館	A (○)	9:30～17:30	月曜日（第3日曜日の翌日を除く）及び第3日曜日 祝日及び休日の翌日（翌日が日曜日又は休館日にあたるときは、その翌々日）
直方市石炭記念館	A (○)	9:00～17:00	月曜日、第3日曜日、祝日
宮若市石炭記念館	B (○)	9:00～17:00	月曜日（祝日の場合は翌日）、木曜日の午後、祝日
鞍手町石炭資料展示場	A (○)	9:00～17:00	月曜日、第3日曜日、祝日
つきほし歴史館	A (○)	10:00～17:00	無休
久留米絃資料館	B (○)	10:00～17:00	無休
大牟田市石炭産業科学館	C (○)	9:30～17:00	月曜日（祝日の場合は翌日）

¹ Aは鉄道駅から徒歩圏内、Bはバス停から徒歩圏内、Cはその他を示す。また括弧内は無料駐車場の有無を示す

² 年末年始や展示替え期間等を除く一般の休館日

3.5 休館日

各館の休館日は表2に示した通りである。全17館のうち10館までが月曜日を休館日としていた。月曜日は振替などで休日となることが多いが、その場合に開館とする措置を取っていたのは10館中6館であった。残りの4館においても同様の措置を検討してもらいたいところである。

土曜日・日曜日・祝日を休館日とする2館（ゼンリン地図の資料館、TOTO歴史資料館）は、いずれも企業博物館である。両館とも設置企業の社内に開設されており、休館日を休業日に合わせるのはやむを得ないといえる。逆にこの点から高く評価できるのが、わかちく史料館とつきほし歴史館である。両館は上記2館と同じ事情にあるにもかかわらず、土曜日と日曜日を開館日としている。博物館の使命に対する両社の見識が窺われる。なお同じ企業博物館でも、出光創業史料館、門司電気通信レトロ館、白島展示館、九州エネルギー館の4館は独立した敷地に開設されているので、いささか事情が異なる。

問題として指摘しておきたいのが、休館日がわかりにくい事例である。たとえば田川市石炭・歴史博物館のホームページには、年末年始を除く休館日として「毎月曜日（毎月第3日曜日の翌日を除く）及び第3日曜日、国民の祝日及び休日の翌日（翌日が日曜日又は休館日にあたるときは、その翌々日）」と記載されている。たしかに記述は正確なのだが、これを一読して理解できる人は少ないのではないだろうか。筆者が同館の職員に確認したところでは、①原則として月曜日は休館である、②但し第3日曜日が休館なのでその翌日の月曜日は開館とする、③祝休日は開館する、④したがって月曜日が祝休日である場合も開館となる、とのことである。同様のことは、宮若市石炭記念館についてもいえる。こちらでは月曜日と祝日が休館日とされているが、月曜日が祝日である

場合は開館となるそうである。両館とも事情があるかとは思いますが、余計な混乱を避けるためにも、ぜひ利用者の立場から見たわかりやすい休館日設定を心掛けてほしいものである。

3.6 入館料

全17館の入館料を一般大人料金と比較すると、最高が400円で1館、以下300円1館、210円1館、100円3館、無料が11館という結果となった（表3）。博物館の入館料として特に高額なところはないといえよう。

設置者別で見ると、自治体（系）の博物館9館のうち入館料を無料としていたのは4館であった。これに対して企業博物館では、全8館のうちゼンリン地図の資料館を除く7館が無料の措置を取っていた。企業博物館に無料のところが多いのは、当該施設が設置企業の広報・宣伝を兼ねているからである。

なお有料の博物館6館のうち、団体割引などの割引制度を導入していたのは4館であった。中でも田川市石炭・歴史博物館、直方市石炭記念館、大牟田市石炭産業科学館の3館は若い世代の来館者を増やすため、小・中学生や高校生を対象とした割引制度を実施していた。産業博物館は若年層の職業学習・郷土学習の場としても大きな役割が期待されているので、こうした措置は高く評価できる。

3.7 体験型展示

展示方法に関しては、子供たちを中心に人気の高い体験型展示（ハンズ・オン展示）の有無に着目した[21]。表3に示したように、体験型展示を実施していたのは、17館のうち7館であった。やや気になったのは、全体のおよそ3分の1を占める石炭関連の博物館の中で体験型展示を行っていたのが1館（大牟田市石炭産業科学館）しかなかった点である。

表3 福岡県の産業博物館3

館名	入館料 ¹	体験型展示
九州鉄道記念館	大人300円、中学生以下150円、4歳未満無料（○）	○
出光創業史料館	無料	×
門司電気通信レトロ館	無料	○
北九州市門司麦酒煉瓦館	大人100円、中学生以下50円（×	×
ゼンリン地図の資料館	大人100円、中学生以下無料（×	○
TOTO歴史資料館	無料	×
わかちく史料館	無料	×
白島展示館	無料	○
九州エネルギー館	無料	○
博多港ベイサイドミュージアム	無料	○
田川市石炭・歴史博物館	大人210円、高校生100円、小・中学生50円（○）	×
直方市石炭記念館	大人100円、大学生・高校生50円、中学生30円、小学生以下無料（○）	×
宮若市石炭記念館	無料	×
鞍手町石炭資料展示場	無料	×
つきほし歴史館	無料	×
久留米絨資料館	無料	×
大牟田市石炭産業科学館	大人400円、中学生以下200円、4歳未満無料（○）	○

¹ 括弧内は割引制度の有無を示す

たしかに産業博物館は扱うテーマによって体験型展示が有効でない場合もあるので、その有無だけで展示のレベルを評価することはできない。しかし石炭関連の博物館は必ずしも体験型展示が難しいわけではないので、いまだし工夫の余地があると思われる。

3.8 広報

博物館の存在を一般に周知する方法はいくつもあるが、今日最も有効であると考えられるのは、やはりインターネットであろう。本稿で抽出した17館はすべて前節で示した5種類のサイトのいずれかに関連の情報が掲載されているので、広報に関する最低限の条件はクリアしているとみなすことができる。ここではその先の段階として、博物館の側がインターネットをどの程度広報に利用しているかを比較した。

まず全17館を博物館として独立したホームページを持つもの（A）とそうでないもの（B）に分けると、Aは7館、Bは10館という結果となった。しかしこれを設置者別で比較すると、自治体系の博物館では全9館のうち5館がAであったのに対して、企業博物館では逆に全8館のうち6館がBであった（表4）。

既述のように、企業博物館には設置企業の宣伝・広報という性格があるので、博物館に関する情報も当該企業のホームページの中に併載されることが多い。今回の調査でも、Bに分類された企業博物館6館のうち4館（門司電気通信レトロ館、TOTO歴史資料館、わかちく史料館、九州エネルギー館）までが同様の形式を取っていた。残りの2館については、出光創業史料館が出光美術館（門司）の、つきほし歴史館がつきほしバーチャル歴史館のページにそれぞれ関連の情報を載せていた。またBに分類された自治体系の博物館4館については、そのすべてが設置者である自治体もしくは自治体系団体のホームページに関連の情報を掲載していた。

次に各館のページの内容であるが、所在地、開館時間、休館日、入館料などの基本情報はすべての館において情報が提供されていた。またアクセス情報についても全館が地図を併載していた。

残念だったのは、展示内容に関して十分な情報提供がなされていない館があったことである。たとえば、宮若市石炭記念館の紹介ページでは展示内容の詳細がわからず、つきほし歴史館ではポータルページであるバーチャル歴史館の掲載内容（これ自体はとても充実している）と博物館の展示内容との関連が明確ではなかった。また鞍手町石炭資料展示場と出

光創業史料館においては、展示内容を紹介する写真が全く掲載されていない。これらの点については大いに改善の余地があると思われる。

4. おわりに

以上論じてきたように、福岡県には現在、本稿の定義する産業博物館が17館あり、それぞれに特色のある展示を行っていた。また本稿では産業博物館に分類しなかったものの、産業関連の展示を行っている施設は他にも複数確認された。注5でも指摘したように、福岡県は全国的に見ても産業観光の推進に熱心な県である。中でも県内の産業博物館のおよそ半数が集中する北九州市は、官民を挙げてその活性化に取り組んでいる[注12]。その成果は産業観光を目的とした観光客数の増加となって現れており（表5）、そうした中で産業博物館はきわめて大きな役割を果たしているのである。

それでは最後に、福岡県の産業博物館の今後の展望について二つの視点から考察し、本稿の結びとしたい。

一つ目は、今回の調査では産業博物館に分類しなかったものの、類似の施設として今後の発展が大いに期待できる事例である。候補となる施設はいくつもあったが、ここではその代表格として、ともに北九州地域に所在する北九州イノベーションギャラリー（北九州市）と日立金属株式会社鋳物記念館（苅田町）を取り上げる。

北九州イノベーションギャラリーは北九州市が2007年にした施設で、産業関連の展示施設とものづくり体験館を兼ね合わせた内容となっている。場所は産業遺産としてきわめて価値の高い八幡製鉄所東田第一高炉の遺構（現在は史跡広場として公開、図7）のすぐ隣にあり、抜群の立地条件を備えている。ただ常設展示が産業史のパネルとコンピュータ検索しかないため、今回の調査では博物館としての要件を満たしていないと判断した（図8、図9）[注13]。とはいえ場所が場所だけに、常設展示の充実さえ図れば、北九州を代表する産業博物館となる可能性を秘めている。今後の発展に期待したい。

一方、日立金属株式会社鋳物記念館は、同社の前身、戸畑鋳物株式会社の設立（1910年）に関わる資料や創業者鮎川義介の遺品、当時の製造機械などを集めた施設である。収蔵資料からすれば、文字通り「産業博物館」に他ならないのであるが、一般公開を前提とした施設ではない（同社の公式ホームページにも関連の情報が掲載されていない）ため、今回は

表4 独立したホームページの有無（有がA、無がB）

	自治体系博物館（計9館）	企業博物館
A（計7館）	九州鉄道記念館、北九州市門司麦酒煉瓦館、田川市石炭・歴史博物館、直方市石炭記念館、大牟田市石炭産業科学館（計5館）	ゼンリン地図の資料館、白島展示館（計2館）
B（計10館）	博多港ベイサイドミュージアム、宮若市石炭記念館、鞍手町石炭資料展示場、久留米餅資料館（計4館）	出光創業史料館、門司電気通信レトロ館、TOTO歴史資料館、わかちく史料館、九州エネルギー館、つきほし歴史館（計6館）

表5 北九州市の季節型観光客数の推移（単位：万人）

	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年
まつり	486.9	502.8	509.2	428.0	459.9	475.1	440.7
コンベンション	34.8	44.7	69.2	38.5	39.2	47.2	46.9
産業観光	12.6	12.7	12.1	14.6	15.6	16.5	18.2
海水浴	6.5	8.2	7.0	6.6	6.5	6.0	6.9
計	540.8	568.4	597.5	487.7	521.2	544.8	512.7

（北九州市観光動態調査・平成21年次より）[22]

リストから除外した。但し資料そのものは一級品で、中でも1924年製造の「トバタ式農工用小型石油発動機」は経済産業省の近代化産業遺産にも認定されている。設置場所が同社の九州工場内ということで、色々と難しい問題があるかと思うが、ぜひ一般公開に向けた取り組みを進めてもらいたい。

二つ目は、貴重な産業遺産がありながら、いまだ相応の展示施設が設置されておらず、今後の発展が望まれる事例である。この点から取り上げたいのが、福岡地域にある志免鉱業所関連遺産（志免町）である。志免鉱業所は戦前・戦後を通じて一貫して国営だったわが国唯一の炭鉱（1964年閉山）として知られるが、その遺産として世界的にも貴重な堅坑槽が残されているのである（図10）。1943年竣工のこの堅坑槽は鉄筋コンクリート造りで、高さは52.7mにも及ぶ。同種のものは世界でも3基（他はベルギー・トランブルール炭坑と中国・龍鳳炭坑）しか現存しておらず、2007年には経済産業省の近代化産業遺産に、2009年には国の重要文化財に指定された。また周囲には石炭を運び出した坑口跡やボタ山（石炭採掘の際に出る廃土・廃石の集積場）も保存されており、まさに産業観光にはうってつけの場所である（図11、図12）。

志免町では国の重要文化財に指定されたのを機に、これを観光資源として生かそうとホームページなどで熱心にアピールをしている。ところがそうした姿勢とは裏腹に、付近には志免鉱業所の歴史や往時の炭坑の姿を紹介する展示施設が存在しないのである[注14]。産業観光を町の重要施策として考えるなら、単に遺産を保存するだけでは十分ではない。予備知識の少ない観光客にその魅力を知ってもらうには、核となる施設が必要なのである。重要文化財クラスの産業遺産はどこにでもあるわけではない。簡易な展示施設ならそれほど予算をかけなくても設置できるので、ぜひ前向きに検討してもらいたい。既述のように、もともと福岡地域には産業博物館が少ないので、志免町にとってこれは来訪者を増やすための大きなチャンスとなるであろう。

謝 辞

本研究の一部は、科学研究費補助金・基盤研究(C)「日本の産業博物館の現状と課題について」(課題番号20605004)及び学術研究助成基金助成金・基盤研究(C)「産業博物館を軸とした産業観光のモデル化について」(課題番号23614007)により行われた。助成に感謝申し上げる。

図7 東田第一高炉

図8 北九州イノベーションギャラリー

図9 常設展示

図10 志免鉱業所堅坑槽

図11 第八連卸坑口

図12 ボタ山からの眺め

注

- [1] 2010年公募の科学研究費補助金に時限付き細目として「観光学」が加えられたのも、こうした流れに沿ったものといえる。
- [2] 観光庁の統計によれば、2008年度の旅行消費額は23.6兆円、その生産波及効果は51.4兆円（産業連関表国内総生産額の5.3%）に上るという。
<http://www.mlit.go.jp/kankochou/siryou/toukei/kouka.html>
- [3] 2010年に開催された上海万博でも日本館とは別に「日本産業館」が設けられ、人気を博した。
- [4] 企業が社会貢献の一環として行う芸術文化支援のこと。わが国では1990年に社団法人企業メセナ協会が設立された。
- [5] 福岡県では2010年7月17日から9月23日まで、福岡県産業観光推進協議会主催による「産業観光ふくおか モノづくりモノがたり」キャンペーンが実施された。同協議会発行のパンフレットには、県内86カ所の産業観光施設（工場見学等を含む）が紹介されている。
- [6] いずれのサイトにも情報が載っていない施設は、そもそも広報のあり方に問題があると思われるので、今回の調査対象からは除外した。
- [7] 福岡県には、政令指定都市2市（福岡市、北九州市）を含む計60の自治体（28市30町2村）がある。各自治体のホームページには、福岡県のホームページからアクセスすることができる。
- [8] 福岡県はその地理的・経済的・歴史的特性から、北九州（4市9町）、福岡（10市9町1村）、筑豊（5市9町1村）、筑後（9市3町）の4地域に分けられる。本文で挙げた産業博物館の所在地についていえば、北九州市は北九州地域、福岡市は福岡地域、田川市、直方市、宮若市、鞍手町は筑豊地域、久留米市、大牟田市は筑後地域に当たる。詳しくは福岡県ホームページの下記ページを参照。
<http://www.pref.fukuoka.lg.jp/shichoson/v010101.html>
- [9] 博多・太宰府（太宰府）方面から下る薩摩街道と小倉方面から下る秋月街道がこの地で交わる。
- [10] 万田坑は大牟田市と荒尾市（熊本県）にまたがるが、主要な遺構はすべて荒尾市側にある。また荒尾市には万田炭坑館という産業博物館があるが、福岡県ではないので、本稿では取り上げない。
- [11] 但し企業博物館に関しては、当該企業の社屋や敷地内に併設される場合など、開館時間に制約を受ける要因が多い。今回調査した博物館の中でも、開館時刻が最も遅い10時開館の6館のうち久留米餅資料館を除く5館はすべて企業博物館であった。また閉館時刻が最も早い16時閉館の2館もこの5館に含まれた。
- [12] 北九州市は2006年に「全国産業観光フォーラム」を誘致・開催したほか、2009年には全国産業観光推進協議会が主催する「産業観光まちづくり大賞」で金賞を受賞した。また同市の公式ホームページには、県内60市町村の中で唯一、独立した産業観光の案内ページがある。
http://www.city.kitakyushu.lg.jp/page/kankou/study_tour/index.html

- [13] 博物館を観光資源として活用するには、インターネットでは配信できない（実物を見ることに意義がある）資料を展示する必要がある。近年は情報通信技術の発展によりバーチャル・ミュージアムの議論が盛んであるが、バーチャルでは代行しえない部分にこそ観光の価値（＝観光によって充足される感性価値）があるのである。無論、これはバーチャル・ミュージアムの意義を否定するものではない。
- [14] 志免町歴史資料室（町役場に隣接）には関連の展示があるが、堅坑槽からかなり離れているうえ、展示スペースが狭く、内容も十分とはいえない。

参考文献

- [1] 日本政府観光局統計
http://www.jnto.go.jp/jpn/tourism_data/index.html
- [2] 武田竜弥：日本の産業博物館の現状と課題，日本感性工学会論文誌，Vol.8，No.4，pp.1179-1184，2009.
- [3] 須田博，徳田耕一，安村克己：新・産業観光論，すばる舎，2002.
- [4] 須田博：産業観光読本，交通新聞社，2005.
- [5] 社団法人日本観光協会全国産業観光推進協議会（編）：産業観光100選，交通新聞社，2008.
- [6] 矢作弘：産業遺産とまちづくり，学芸出版社，2004.
- [7] 馬淵浩一：IT時代の産業技術博物館構想，玉川大学出版部，2001.
- [8] 加藤有次，鷹野光行他（編）：博物館学概論，雄山閣出版，pp.199-203，2000.
- [9] 諸岡博熊：企業博物館，東京堂出版，1995.
- [10] 亀田訓生：企業ミュージアム，ピーエーエヌ，1998.
- [11] 日外アソシエーツ編集部：新訂企業博物館事典，日外アソシエーツ，2003.
- [12] 武田竜弥（編著）：日本全国産業博物館めぐり，PHP研究所，2008.
- [13] 武田竜弥：佐渡の産業遺産と産業博物館，日本感性工学会論文誌，Vol.9，No.2，pp.465-474，2010.
- [14] <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/>
- [15] <http://www.museum.or.jp/>
- [16] <http://museum-dir.jst.go.jp/>
- [17] 北九州地域史研究会（編）：北九州の近代化遺産，弦書房，2006.
- [18] 平井東幸，種田明，堤一郎（編著）：産業遺産を歩こう，東洋経済新報社，2009.
- [19] 九州産業考古学会（編）：福岡の近代化遺産，弦書房，2008.
- [20] 筑豊近代遺産研究会（編）：筑豊の近代化遺産，弦書房，2008.
- [21] ティム・コールドトン，染川香澄他訳：ハンズ・オンとこれからの博物館，東海大学出版会，2000.
- [22] http://www.city.kitakyushu.lg.jp/san-kei/file_0065.html

武田 竜弥（正会員）

1989年東京外国語大学ドイツ語学科卒業。1991年東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程修了。1992年東京都立大学人文学部助手。1995年名古屋工業大学工学部専任講師。現在、同大学院工学研究科准教授。2002年日本感性工学会に感性社会学研究部会を設立、同部会長を務める。2003～2007年日本感性工学会理事。2007～2011年同評議員。2005年著書『感性と社会』にて日本感性工学会学会賞（出版賞）受賞。